岩倉城遺跡

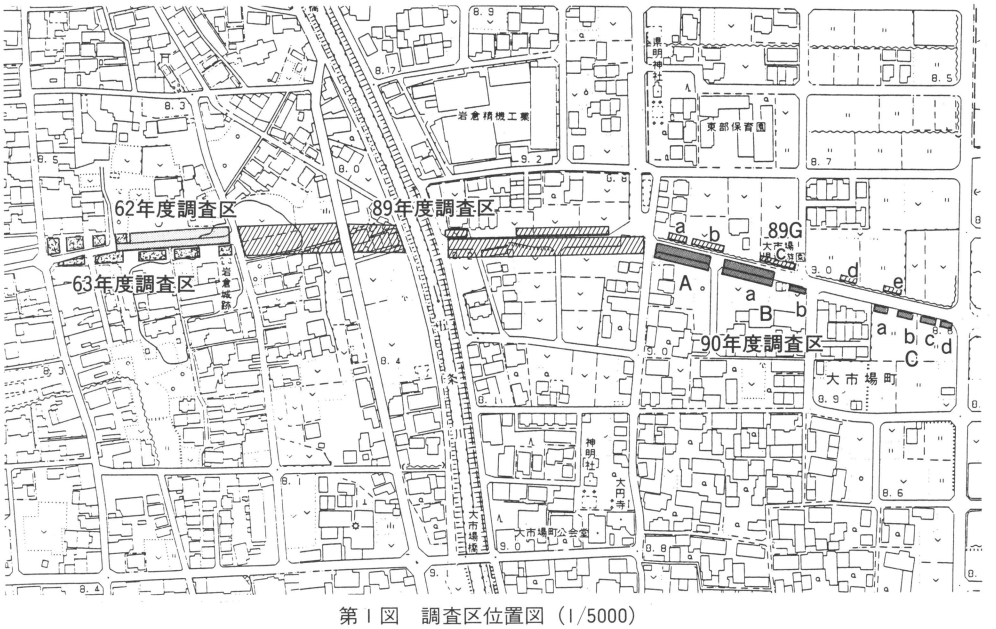
調査の経過

岩倉城遺跡は、戦国時代における尾張北部の拠点であった岩倉城跡を中心とする遺跡であり、尾張平野を南流する五条川の両岸に細長く形成された標高10m前後の自然堤防上に立地する。行政的には、岩倉市下本町から大市場町にかけて広がりをもつ。

遺跡遠景（南西から）

発掘調査は、県道萩原多気線建設に伴うものであり、昭和62年度以降継続して調査をすすめてきた。昨年度までに、岩倉城の主要部分を中心に7,470m²の調査を終了しており、二重の堀に守られた堅固な岩倉城の姿が明らかになりつつある。

今年度は、遺跡の東端部を3,000m²にわたり調査を実施したが、生活道路の確保、水道管の維持等により、調査区は寸断されたものになった。しかし、B区において、岩倉城の東限を示すと考えられる堀状の遺構を確認でき、また、下層の調査では、縄文晩期の竪穴住居や古墳時代の集石墓群等を検出し、新たな知見を付け加えることができた。



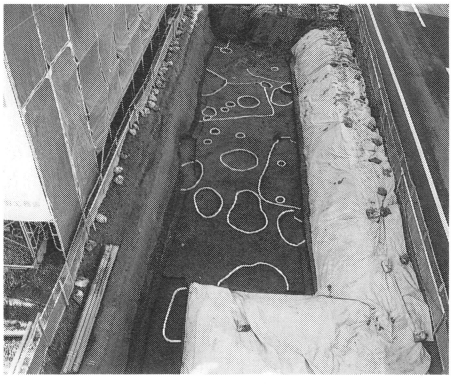
第1図　調査区位置図（1/5000）

調査の概要

今年度調査区の基本層序は、第Ⅰ層：整地土、第Ⅱ層：褐色シルト（戦国・中世）、第Ⅲ層：淡褐色砂（古墳・弥生）、第Ⅳ層：黒褐色砂質シルト（縄文晩期）である。遺跡は、出土遺物により大きくⅠ期からⅥ期に区分されるが、今回の調査においてはⅢ期（奈良時代）の遺構・遺物はみられなかった。以下、各時期の概略を述べていく。

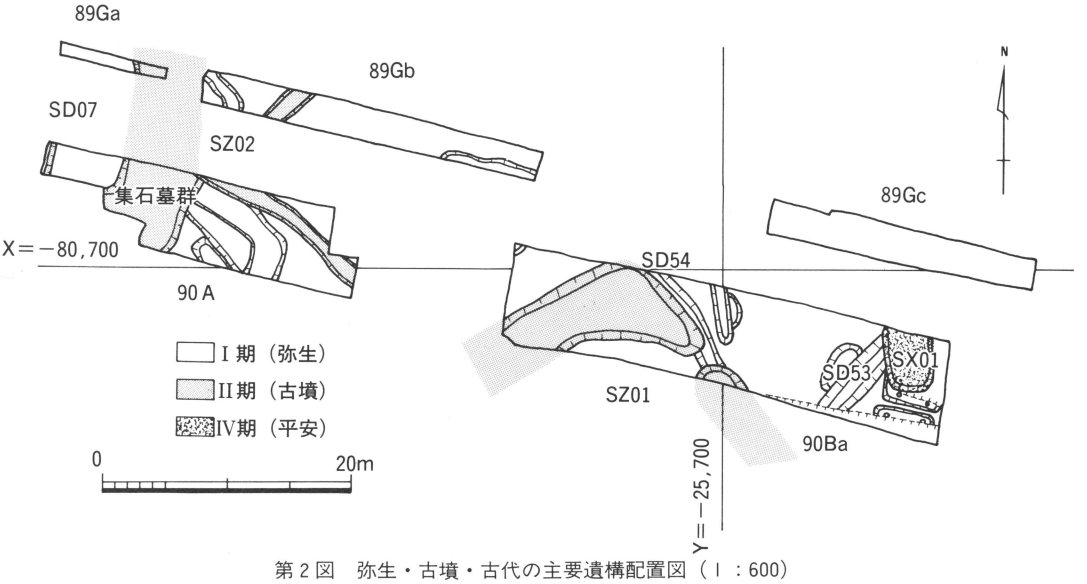
Ⅰ期（縄文～弥生時代）　従来の知見になかった縄文晩期と弥生中期の遺構・遺物を検出した。縄文晩期の遺構としては、竪穴住居４棟、土坑数基がある。また、弥生中期の遺構には、竪穴住居２棟、溝数条があり、貝田町期を中心とした遺物が出土している。

Ⅱ期（古墳時代）　６世紀前半以前に築造された方墳の周溝を再利用する形で築かれた集石墓群（６～７世紀）を検出し、主体部を７基確認した。また、５世紀後半に比定される方墳（ＳＺ01）も確認している。

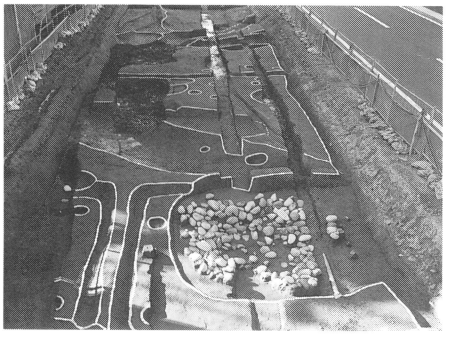


縄文晩期の遺構（東から）

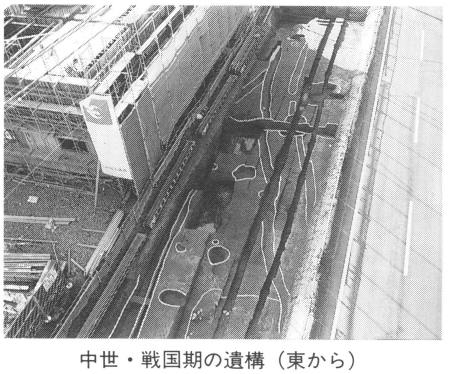
集石墓群（西から）



第２図　弥生・古墳・古代の主要遺構配置図（Ｉ：600）



集石遺構（東から）

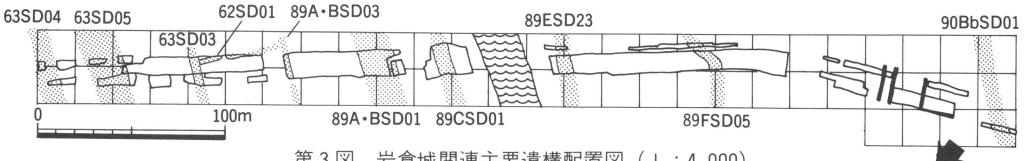


中世・戦国期の遺構（東から）

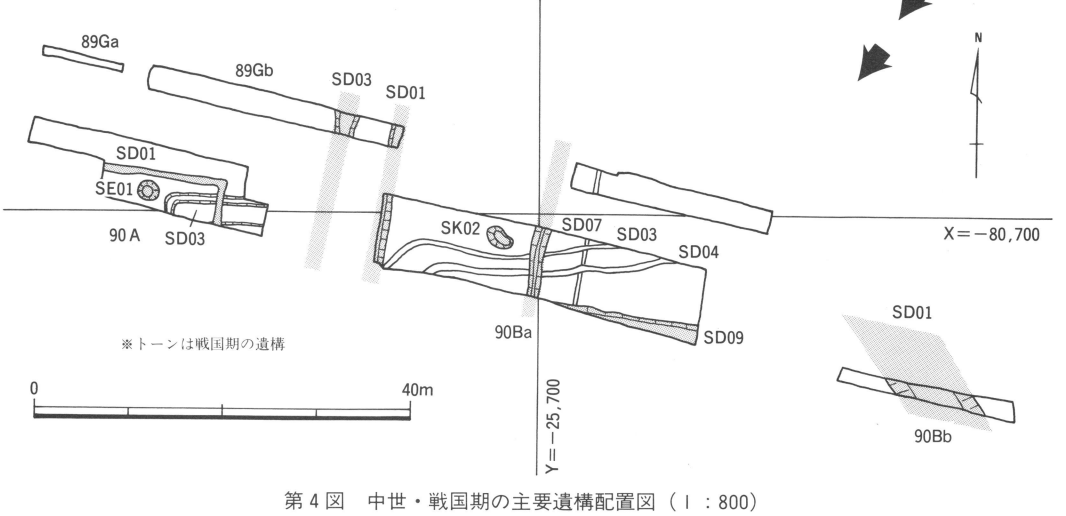
Ⅳ期（平安時代）　集石遺構（ＳＸ01）を確認している。これは、井戸状の土坑が廃絶した後、人頭大の河原石を方形状に集積したものであり、灰釉椀が出土している。

Ⅴ期（中世）　調査区のほぼ全域で13～14世紀を中心とした遺構・遺物がみられた。特に、Ba区を並行して斜めに横断するＳＤ03・04は規模・形状ともに酷似しており、道の可能性が考えられる。

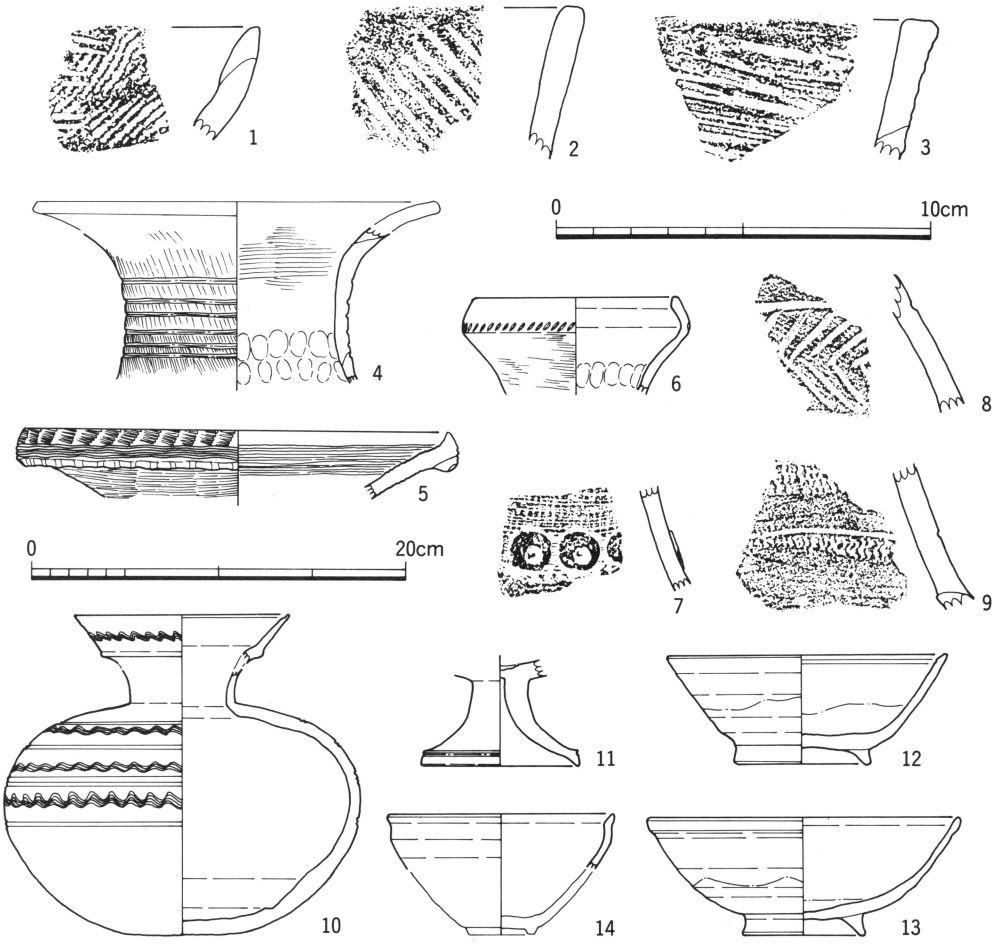
Ⅵ期（戦国時代）　Ⅵ期の遺構には、溝・井戸及び土坑がある。Ba区で検出した溝数条は、幅１～２ｍの規模であり、東西・南北方向にほぼ直交する形で配置される。Bb区ＳＤ01は、幅10ｍ・深さ３ｍの規模を持つ堀状の遺構である。この溝を境として、戦国期の遺構・遺物は全くみられなくなり、岩倉城の東限を示す注目すべき遺構といえよう。



第３図　岩倉城関連主要遺構配置図（１：4,000）



第４図　中世・戦国期の主要遺構配置図（１：800）



1～3　縄文晩期（包含層）　4（SD54）　5～9（SD53）
10～11（SZ01）　12～13（SX01）　14（SD09）
第5図　出土遺物実測図（1：4、拓図1：2）

まとめ

県道萩原多気線建設に伴う岩倉城遺跡の発掘調査も、今年度で一応終了することになる。4年間に及ぶ発掘調査は、尾張の拠点的な城でありながら実像の不明であった岩倉城を現代に甦らせるかの如く、多数の遺構と夥しい遺物を我々に提供した。しかし、それらは物言わぬ「もの」であり、かつ様々な問題を内包している。今後、整理作業に入るわけだが、考古学的分析を中心に据え、文献史学、歴史地理学等の成果を取り入れながら、岩倉城を多角的に検討していく必要があろう。そうすることによって、物言わぬ「もの」が自ずと我々に歴史を語りかけてくれるものと信ずる。

最後に、蛇足的だが、岩倉市の周辺は、名古屋のベッドタウンとして開発が急であり、存亡の危機にたたされている遺跡も少なくない。行政的な配慮を期待したい。

（服部信博）